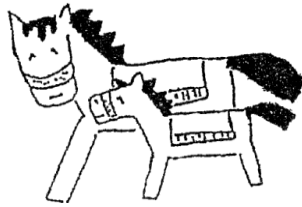


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

24年 5月 NO. 210



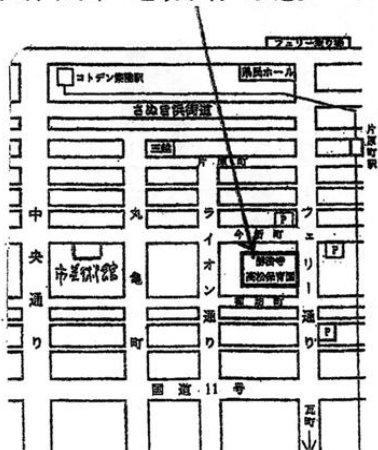
(厚生労働省・高松市委託事業)

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

～どなたでも～		5月の主な活動		～お気軽にどうぞ～
5月 8日	火	花まつり 10:00～11:00	おしゃかさまのお誕生をお祝い する行事にどうぞ。	
5月 11日	金	おはなしの会 10:00～11:30	「こどもの日」にちなんで大型絵本やおはなし もあります。どなたでもおいで下さい。	
5月 12日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。	
5月 19日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も育児体験においで下さい。	
5月 24日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	「病院における生活相談支援について」 安田準一氏（医療ソーシャルワーカー）から お話を聞きフリートークします。	
5月 25日	金	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師（小児科）にゆっくり 相談できます（予約要）	
5月 26日	土	スピーチ講座 14:00～16:00	平瀬先生（元N.H.Kアナウンサー）による わかりやすい話し方とボイストレーニングの 講座です。（年6回シリーズ）	

<p>・火～金の13時～16時までは、園内開放しています ので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み)</p>	<p>育児相談（月～土）9:00～18:00 しつけや子育てについての悩み、保育園生活、 入園・見学についての相談もどうぞ。</p>
--	---

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童話集
「明るいはうへ」より

お家が、町が。
お寺のそとで
つうぼらいた
ひいらいだ

手をつないだ子ども。
お寺の庭で
つうぼらいた
ひいらいだ

れんげの花が。
お寺の池で
つうぼらいた
ひいらいだ

れんげ



母親から離れたがらない

こどもの城小児保健部 臨床心理士 井口 由子さん

〈分離不安〉とは？

赤ちゃんは、主な養育者（お母さんもお父さんも含めて「親」としておきます）に身体ごと守られながら育ち、離れると不安になり泣くのが普通です。1～2歳で親にくっついたり離れたりしながら、だんだん外の世界へと自力で踏み出すことに挑戦します。

子どもが「親から離れたがらない」とは、自分がまだ情緒的にひとりでは新しい環境に乗り出せないという不安を表すものでしょう。また、親との関係がどこか不安定で、もっと私の方を見てという愛情希求のサインでもあり、離れてしまったら親を失ってしまうかもしれないという不安かもしれません。

正式に〈分離不安〉という診断名もあります。これは、3歳以降で初めて集団に入るときなどに、ある程度時間をかけてもなじむことができず、いつまでも親から分離できないこと・自立できないことをさすものでしょう。

一般的には、3歳くらいになるとそれまでの親との情緒的な結びつきを基盤にして、心のなかに親のイメージがしっかりできてきます。そして、自分の行動のコントロールもできてくるので、今そこに親がいなくてもある程度過ごせるようになるのです。



〈離れない〉訴えの背景

[こどもの城]の小児保健クリニックの心理相談にお母さんたちが「この子はなかなか私から離れない」「私にくっついていて子どものなかに入らない」と子どもを連れてくる場合には、いろいろなケースがあります。ここでは、地域の子育て支援の広場などでも出会うであろうケースも含めて、それらの訴えの背景にある最近の傾向について取り上げてみます。

1. 早くから子どもに自立を求める時

これは、子どもの本来の発達段階より早く、親からの自立を求めがちな傾向のことで、20年くらい前までは、1～2歳になると公園などに遊びに行き、地域に「デビュー」していたものでした。親も子もそこで少しずつ友だちを作り、子どもの成長を見守っていくのが普通だったように思います。しかし現在、都会などでは、週1回くらい親子一緒に体操や音楽などの習い事に通い、小グループで一定の時間、専門の先生に指導を受けながら過ごす傾向があります。

プログラムに沿って子どもに働きかけた方が安心であり、友だちも作りやすいようです。また、幼稚園でも2歳児の教室などを設置しているところが多く、それらに通いながら、自分たち親子がその環境に合っているかを見定めているようです。

これらは決して悪いことではないのですが、プログラムにそった集団行動になると、そこにすぐ合わせられる子ども、すぐになじめない不安な子ども、自分で自由な動きをする子どもと、いろいろでできます。特に1～2歳はまだ自己中心的で気まぐれな時期なので、これは発達の個人差の範囲で不思議ではないことです。

しかし子どもが母親である自分から離れないと、お母さんたちはこれから子どもの集団に入っていけるかどうか、とても不安になってしまうようです。教室のなかには、3～4歳児ならできるような「お行儀のよい」行動をすでに求める場合もあります。ここでは、子どもが自発的に遊ぶことより、大人の作ったプログラムに合う方が「良い子」というイメージが先にたってしまう。もう少し、ゆっくり見守っていてあげていいよ、とってあげたいものです。

2. 家庭が不安定になりやすい時

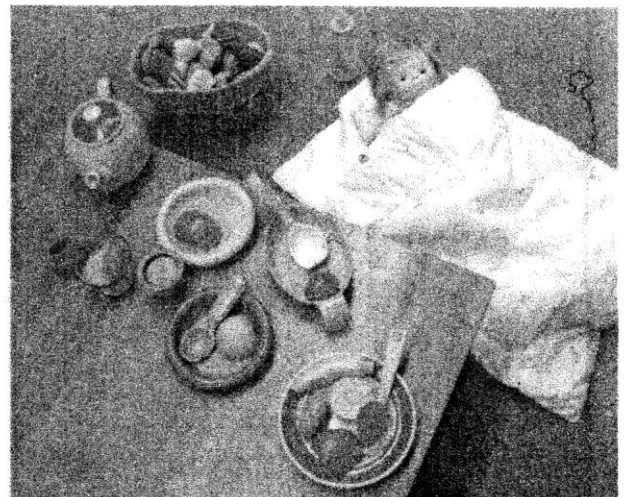
「親から離れたがらない」というケースには、背景には夫婦関係が不安定で、お母さんもわが子の子育てに落ち着いてかかわれないことが続き、子どもも不安定になってしまった、という場合もあります。

両親のけんかの場面をいつも目にしていたり、どちらかが家を出ていってしまったりといった家庭生活を経験していると、子どもも情緒的に不安定になりがちです。またそれをなんとかしたいと思っても、大人の方も今の修羅場を切り抜けるのにせいっぱいのこともあります。そして別居や離婚に至ると、時として経済的・情緒的に不安定になりやすいものです。実家などの援助があれば良いですが、新しい環境への適応や離婚の体験を乗り越えていくには時間もかかります。

子どもが年齢に応じて親から離れて集団生活に適応していくには、ある程度親や家庭に情緒的に支えてもらうことが必要です。両親が不安定で落ち着かないと、自分を支える拠りどころの親を失うのではないかと思ったり、親の不安定さを子どもが心配してしまう状況が生じ、親から離れにくくなるものです。またそうした状況を乗り越えてしばらくしてから、もういちど親との関係を確かめたいのか、親のそばにいたがることもあります。

一般に、子どもは普通にごっこ遊びのなかでも、よく赤ちゃんを寝かせたりミルクをあげたり、ごはんを食べさせたりして世話をします。空想のなかで、自分もお母さんになってみます。しかし、本当はもっとお母さんに甘えたい、気持ちを注いでほしい、という願望もそこに表現されていることがあります。

写真は、心理相談でよくあるそうした遊びのイメージを再現したものです。自分も赤ちゃんのよ



▲子どもの遊びには、意外に深い願望が現れている

うに大事に世話をされ、愛情をもって授乳されたり、食べさせてもらったりしたいという欲求を表しているのです。たくさんの食べ物を食べるといった遊びによって、心の空腹感を象徴的に満たそうとしているといえるでしょう。

3. お母さん自身が不安な状態の時

こうした相談で、親（特にお母さん）とお話を続けていると、しばしばお母さん自身の対人関係の不安、幼少期からの親との葛藤、小さい時に経験した集団生活での否定的な記憶などが語られ、子どもとの関係に影響していることを感じます。

「親から離れない」とは子どもの行動を表すものですが、複数のケースでは、それが親自身の「子どもから離れるのが不安」な気持ちを表しているようでした。たとえば親が子どもの時に、園の先生や子ども同士の間でつらい体験をした思い出があると、親の方が子どもを集団のなかに送り出すのが不安になってしまいます。

また、「子どもの、ある部分が好きになれず、自分も子どもに安定したかわりが持たずに、時々否定的になってしまう」というときには、子どもも気持ちが安定しません。お母さんにしがみついて、そばから離れず機嫌を取りながら動いてしまう、ということになりがちです。子どもにとって、親から離れて自分が生きて行けなくなることほど不安なことはいないからです。



心の安定と家族への気配り

このように「親から離れたがらない」という訴えはよくあるものですが、その解決は意外に難しいものです。結局、子どもの側からは、不安定になっている親との関係をもっと確かなものにしたいという愛着への欲求といえるでしょう。保育者や周囲の支援者が子どもと安心できる関係を作る配慮が必要になります。

でも、多くは親の側の心の状態もかなりそこに反映されており、そちらに目を向けることも大切です。とはいえ、親子が離れられないので一緒に相談にのらなければならず、親にこみいった背景について話を聴くことが難しいのです。また親には子ども自身の問題と受け取られていて、自分についてまったく問題意識がないこともあります。

個人的な経験では、女の子の分離不安が、意外にも難しいと感じられることが多いのですが、これは同性であるがゆえに、お母さんが娘に同一視しやすく、無意識に自分の心のありようを子どもに映し出して見てしまうからかもしれません。

親は親、子どもは子どもの世界、ひとりの個人として分離した世界を作っていくことは意外とたいへんなことなのでしょう。しかし、そこに人としての成長と自立があります。

日本保育協会発行「保育界」より

